



宋代明州城の復元図作成にむけて

山崎, 覚士

(Citation)

海港都市研究, 7:77-82

(Issue Date)

2012-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81003841>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81003841>



宋代明州城の復元図作成にむけて

山崎 覚士
(YAMAZAKI Satoshi)

宋代明州城の都市空間再現の意義

明州城（現在の寧波市）といえば、宋代には東アジア海域交易の玄関口として発展し、高麗や日本またイスラーム商人などが往来した海港都市である¹。とくに日本を往来する貿易商は明州を目指した²。そこでは海外貿易を主につかさどる市舶司が設置されて、渡海証明書（「公憑」）の発給や回収、また貿易品に対する関税（「抽解」）・官による先買（「博買」）などの業務をつかさどった³。また明州は海外貿易の場としてだけでなく、仏教をはじめとする種々の文化交流の基点としても重要な都市であった⁴。こうした宋代以降の明州に注目し、平成17年から21年度にかけて文部科学省科学研究費補助金・特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成——寧波を焦点とする学際的創生——」（領域代表：小島毅〔東京大学大学院人文社会系研究科・准教授〕）が進められて、現在その成果として『東アジア海域叢書』（全20巻、汲古書院）が刊行されつつある。

このように明州の歴史的重要性が近年、よりいっそうクローズアップされているが、明州という都市そのものに注目した研究は意外に少ない。たとえば海外貿易をおこなう異国の海商や、日本より遙々やって来た禅僧などが闊歩した明州城はどのような街並みであったのか。根本的な問題として、宋代の明州城が海外貿易に関するだけでなく、日常空間としてどのような構造をもっていたのか。官吏の出入りする官舎はどこか、賑わいをみせる市場はどこか、学校・兵舎・寺院はどこか、等々。そして異国情緒を漂わせる海外貿易がおこなわれる場と日常空間との関係性は如何。こうした問題は、宋代の都市一般の問題と

1 斯波義信「港市論——寧波港と日中海事史——」（『アジアのなかの日本史Ⅲ 海上の道』東京大学出版会、1992年）

2 榎本渉『東アジア海域と日中交流——九～一四世紀——』（吉川弘文館、2007年）

3 山崎覚士「貿易と都市——宋代市舶司と明州——」（『東方学』116、2008年7月）

4 東アジア美術文化交流研究会編『寧波の美術と海域交流』（中国書店、2009年）など。

しても重要な課題である。宋代の都市研究は、開封や臨安などの都市空間の解剖が中心⁵で、地方都市についてはほとんど手がついていない⁶。やはり宋代明州城の空間を解剖することは、当時の港湾都市の社会を知るうえで、海港都市明州の歴史的位相を知るうえで欠かせない。

都市図復元のこころみ

明州城の都市空間図を復元するこころみは僅かながらなされてきている。斯波義信氏は清末の寧波市を復元され、会館や市場、宗教施設等の立地場所を明らかにされている（前掲注斯波氏著書）。その後、改めて寧波市の復元図を作成されているが（前掲注斯波氏論文）、この地図の場合、清代の建物とそれ以前のものとは混在しており、必ずしも一時代の都市図とはなっていない。たとえば市舶務と市舶司が併せて描かれているが、市舶司の位置は宋代のそれとしてよいが、市舶務の位置は元代の市舶司と思しい。また筆者の管見の限りでは、波斯団の位置も改めた方がよいし、靈橋門より西に延びる道路を「薬行街」と記してあるが、そのように名づけられるのは清末期まで待たなければならない。都市は生きものだから、時代とともに変化する。やはり宋代の明州城を復元しなければならない。

宋代の明州城については、つとに梅原郁氏が都市図を作成されている⁷。その論文は都市図の復元がメインではないものの、主に宋代明州城の橋梁を記しあって、都市図復元にとって非常に有益である。また筆者も以上の先学にもとづき、靈橋門付近の市舶司関係の空間配置を論じたことがある（前掲注山崎論文「貿易と都市」）。

復元のための史料

宋代明州城の都市復元図を作成するときに先ず利用するのは、宋元時代の地方志である。明州の地方志は『乾道四明図経』をはじめとして比較的多く存在し、明代や清代、そして民国期にいたるまでである。また地名の移動も比較的少ないので、復元しやすい。これらの地方志は近日『中国地方志』全文検索データベースとして発売されているため、地名等の

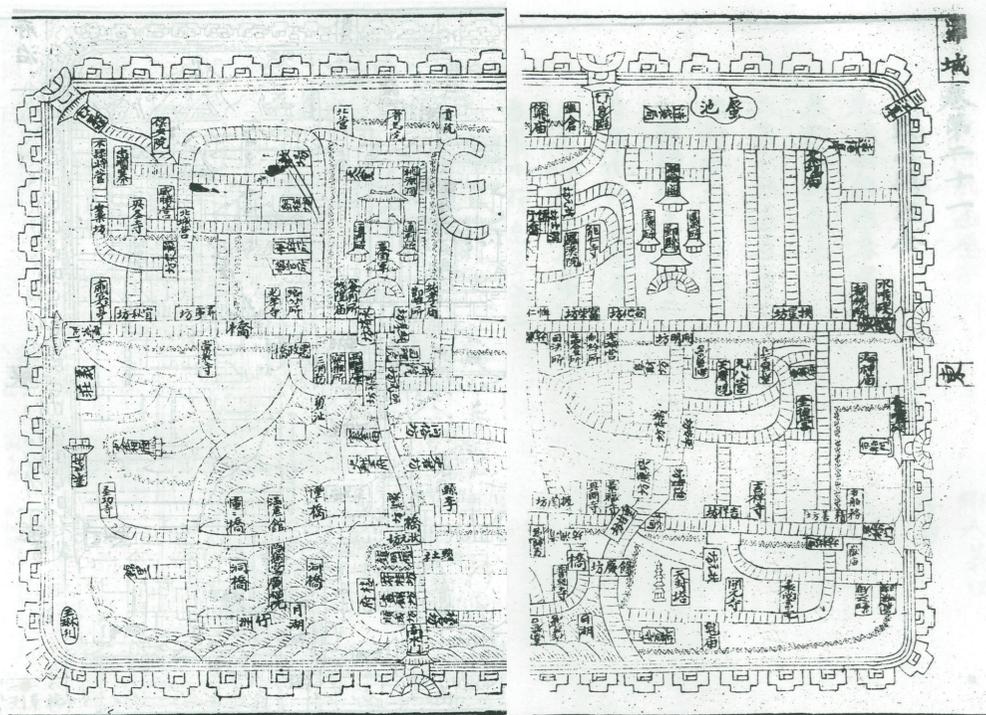
5 久保田和男『宋代開封の研究』（汲古書院，2007年），斯波義信『宋代江南經濟史の研究』（汲古書院，1988年）など。

6 伊原弘『王朝の都 豊饒の街』（農山漁村文化協会，2006年）は宋代の建康・蘇州城などについて解説されている。

7 梅原郁「宋代都市の税賦」（『東洋史研究』28-4，1969年12月）

検索がおこないやすくなった。また明代に編纂された地方志の一つである『敬止録』も役立つ。そのほか、寧波出身の清・全祖望撰『鮎埼亭集』には寧波地理の考証を載せる。また清・徐兆昺『四明談助』も大いに参考になる。現在の『寧波市地名志』も入手が難しいものの有益である。

地図史料として『宝慶四明志』に載せる図が参考になる⁸。ここでは実際には卵型の都市空間が中国の伝統的都市空間である方形に描かれているが、街道や水路・施設などを描いている。それらを見ていると、斯波氏が最初に作図した寧波市図にさほど大きな変更は必要なさそうだ。民国期の『寧波市全図』(中華民国十八年、寧波市政府製)も大いに役立つ。そこで斯波氏作成の地図を下地として、梅原氏の宋代明州城図を参考にし、諸史料を突き合わせて、各施設をひとつひとつ追ってゆく作業が求められる。ただ主に利用する宋代の地方志は南宋末期のものなので、復元できる都市図もその時期のものとなることに注意が必要である。



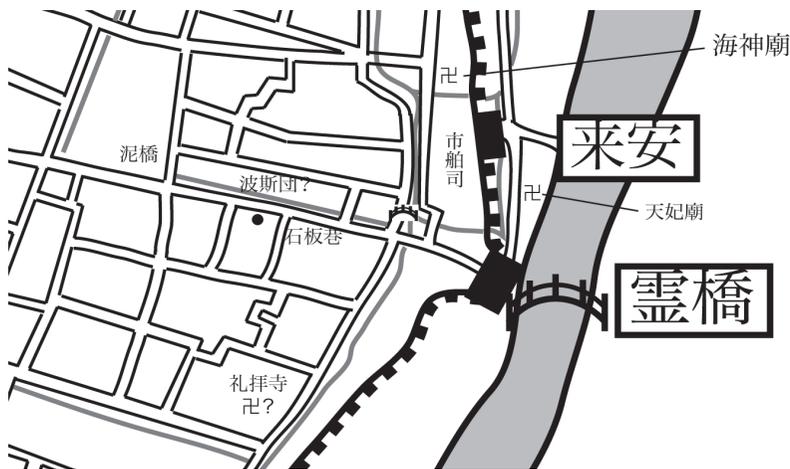
【宝慶四明志・羅城図】

8 ただしよく利用される宋元地方志叢書・宋元方志叢刊本には図を載せず、中国方志叢書本(華中地方575号『浙江省四明志』)には載せる。

復元の一端

『開慶四明統志』巻7に「樓店務地」という条がある。本条に注目された梅原氏によると、その内容は紹興経界法によって明州城内の同地を三等九則にランク付けしたもので、当時の明州城内における土地評価がうかがい知れる貴重な史料だ。梅原氏によってその概要を知ることができるが、できればより詳しく明らかにしてみたい。そして比較的時間の近い『宝慶四明志』と併せて復元してゆくことで、他の都市では知りえない多くのことが明らかになるだろう。

明州城は大きく4ブロック（「廂」）に分割されるが、それぞれのブロックごとに都市空間として特徴を備えている。東北廂は市場が多くみられる商業区、東南廂は市舶司などが置かれ異国情緒の漂う区、西北廂は官舎など官の業務に関する建築物が多い区、西南廂は月湖を中心として別荘が見られる風景区である。もちろん截然と区分できるわけではないが、おおよそその特徴として挙げることができるだろう。



まだ作業途中ではあるが、東南廂の一部を示したのが上図である。基点となる靈橋門より城内に入ると、まず市舶司が北に位置する。ただし、市舶司を通じた貿易業務を行うときには、来安門が利用された。貿易船は来安門にあった来安亭に船をもやい、舶来品を多く市舶司（中に市舶庫がある）へと運んだ。先の『開慶四明統志』の「樓店務地」条によれば、その靈橋門を西に向かった街道付近に波斯団（おそらくイスラーム系のショップ）があった。ちなみにこの道は清末期に薬局が多く立ち並んだことから、名を「薬行街」と呼ばれるようになる。それら薬品は多く東南アジアなどから輸入されたであろうから、宋代の名残りを留めていたのだらう

う。また車橋を南に進むとイスラーム系寺院である礼拝寺（回回堂）があったという⁹。こうして見てゆくと、明州城の東南エリアでは市舶司やイスラーム系商人に関する施設が見られ、また海商の信仰を多く集めた海神廟や天妃廟（いわゆる天后宮）も確認され、海商たちで賑わい異国の雰囲気漂う空間だったようだ。



よりいっそうの賑わいを見せたのは東北のエリアだ。基点となる東渡門から西に延びる街道が明州城の中心街であり、開明橋の向かいに鄞県治、西に行くと子城などの官衙がならぶ。県治の前には「大市」があり、また上図で示したように「後市」もあった。また大市を西に進むと飯行橋という橋も見える。市場と官衙がきわめて近接するのが特徴である。そしてそのあいだに「法場」（処刑場）が挟まれて立地したらしく興味深い。都稅務では鮮魚や貝類、またミカンなどの果物に対して商税をかけており、日常に売買される商品がうかがい知れる。

こうして見てくると、宋代明州城では、都市民の日常生活を支える市場などは東北エリアに位置し、舶来品などは近接しながらも東南エリアに集中していたようだ。都市内部で“住み分け”がなされている。しかしより大きく明州城を二分すると、東側半分は商業的領域が中心となっている。それはやはり水路として奉化江・余姚江・甬江が交差する三江口によるだろう。

復元図の展開

こうした復元図に、さらには禁軍・廂軍の軍営、また都市の特徴でもある救済施設としての広惠院、官営の薬局、貧しい者のための漏沢園（共同墓地）などを加えてゆくことで、より明州城の都市空間が鮮明となってくる。また県学や寺院などの文教施設も重要だ。瓦

9 林士民・沈建国『万里絲路——寧波与海上絲綢之路——』（寧波出版社，2002年）

市・妓楼なども存在したはずである。復元すべき作業はまだまだ山積みである。

復元作業が進めば、再び『開慶四明統志』「楼店務地」条にもどって、どの区域がどの等則かを知ることができる。さすれば等則の傾向とその意味を考察し、宋代明州城という一地方の海港都市の特徴を明らかにできると思う。

さらには宋代明州城が元代となるとどうなるか。市舶司は東渡門近くに移動し、礼拝寺もその側に移動したという。そこには元代の特徴が表れているだろう。都市図復元の探究心はまだまだ尽きない。

(佛教大学歴史学部)